

# 服をめぐる

衣服の研究現場より



一人一品  
漫画家 グレゴリ青山

# 20

TAKE FREE

公益財団法人 京都服飾文化研究財団 (KCI) 広報誌

## 服をめぐる 20

一人一品

漫画家×KCI收藏品

グレゴリ青山「グレーヌの悦び」 p4

KCI Wunderkammer

シュミゼット p12

地産街道を行く

京都市染色ものがたり ③ p14

今日の補修室 第20回

補修室の七つ道具 ⑤ p20

半芸員の虫眼鏡

扇 p22

お知らせ p24

表紙の収蔵品



『Magasin des modes nouvelles, françaises et anglaises』誌より

出版社：Buisson  
発行年：1789年  
発行地：パリ

『Magasin des modes nouvelles, françaises et anglaises (フランスとイギリスの新しいモード誌)』は1786年から1789年まで、月3回の頻度で発行されたフランスの情報誌。1785年創刊の『Cabinet des modes, ou, les modes nouvelles』誌を引き継ぐかたちで刊行した。本誌は縦17cm、横10.5cmの小型版。パリの催事や社交界の情報、詩などの文芸、当時のファッションに関する情報が全8ページで構成される。また、毎号3枚差し込まれたファッション・イラストは手彩色銅版画という当時の最も新しいメディア。流行を知るうえで迅速かつ詳細な情報として上流階級の人々の心をつかんだ。

### 本誌について

『服をめぐる』は、京都服飾文化研究財団(KCI)が収蔵する膨大な西洋服飾コレクションを手がかりに、服飾の歴史や文化を分かりやすくお伝えする小冊子です。文学者やアーティストからの視点、日本の伝統産業との関わり、研究現場からのレポートなど、さまざまな観点から服飾の世界にアプローチします。服をめぐる旅が今、ここから始まります。

### 京都服飾文化研究財団(KCI)とは

京都服飾文化研究財団(The Kyoto Costume Institute, 略称KCI)は、西洋の服飾やそれにかかわる文献資料を収集・保存し、調査・研究する機関として、1978年に株式会社ワコールの出捐によって設立されました。現在、18世紀から現代までの衣装など服飾資料を約13,000点、文献資料を約20,000点収蔵。それらを多角的に調査・研究し、その結果を国内外での展覧会(「ドレス・コード? — 着る人たちのゲーム」展、「FUTURE BEAUTY: 日本ファッションの30年」展、「モードのジャポニスム」展など)や、研究誌『Fashion Talks...』の発行を通じて公開しています。  
Website <https://www.kci.or.jp/>



「ドレス・コード? — 着る人たちのゲーム」展  
京都国立近代美術館 2019年  
©京都服飾文化研究財団 福永一夫撮影

一人一品 漫画家 × KCI 收藏品

# グレゴリ青山

Guregori Aoyama



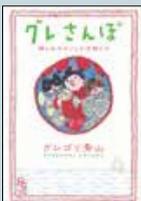
著名人が各々の目を通し、KCIの收藏品を語る「一人一品」。今回のゲストは、漫画家のグレゴリ青山さんです。

グレゴリ青山さんは漫画執筆のかたわら、パッチワークや刺繍などの手芸、服作りにも没頭されていることがあるとか。

そんなグレゴリ青山さんが選んだKCI收藏品は、豪華な刺繍を施した18世紀の男性服。今回の「一人一品」では、この作品の見聞録を漫画にいただきました。

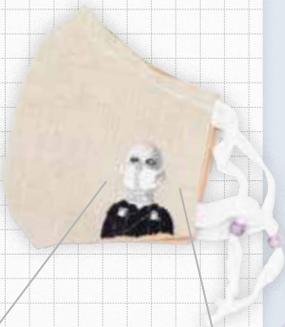
## グレゴリ青山

漫画家・イラストレーター。京都府生まれ。旅や日常のちよつとしたことを独特な漫画に仕立て、人気を博す。近著に『京都深掘りさんぽ』(小学館、2020年)、『グレさんぽ 猫とかキノコとか京都とか』(小学館、2020年)。また、京都国立博物館を紹介するエッセイ漫画『グレゴリ青山の深掘り! 京博さんぽ』を同館ホームページで毎月連載中。



グレゴリ青山さんの

刺繍作品



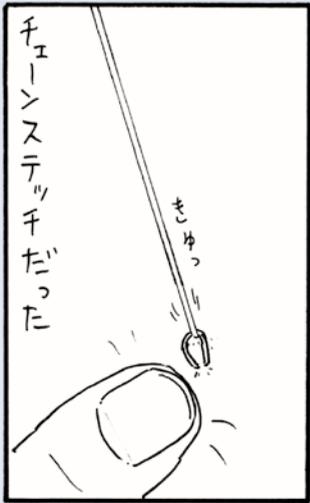
zoom in /



(上) 室生犀星『動物詩集』(室生洲々子編 挿画・刺繍:グレゴリ青山 亀鳴屋刊)の表紙となった刺繍作品。

(右) 昨今必需品となったマスクに、横溝正史の傑作推理小説『犬神家の一族』の登場人物、スケキヨ(犬神佐清)を大胆に刺繍。右ページのマフラーにも同じく「犬神家の一族」からのワンシーンをさりげなく刺繍。いずれもグレゴリ青山作。



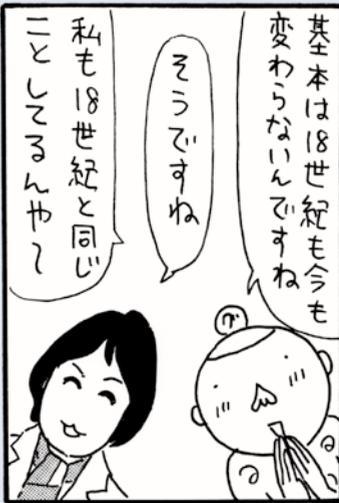


チェーンステッチだった



④がはじめに教えてもらったのは

そうなのだ



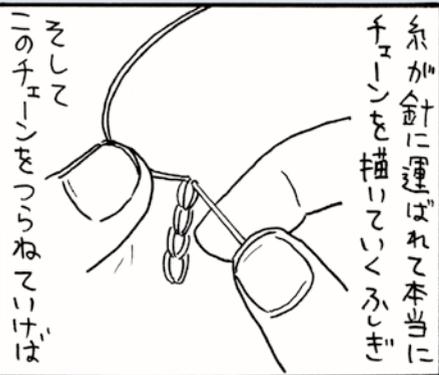
基本は18世紀も今も変わらないんです

そうですね

私も18世紀と同じことしてるんや



細い糸を使ったり、粗い糸を使ったり、糸を替えてみたらまた表情が変わりそう...



糸が針に運ばれて本当にチェーンを描いていく感じが

そして

このチェーンをつらねていけば

どんな文様だって描ける

色違いの糸を使ったら...

もっと太い糸や

細い糸を

使ったり

みたら...



その時思ったのだ

ああ私...今

無限を

手に入れた!

クレーヌ

クレーヌ!



この時代パリでは刺繍工房がいくつかありました

この本は当時の刺繍の解説書ですが



刺繍工房の様子が描かれています

女性も工房で働いてたんですね



セットで着るとこんな感じになります

このベストの刺繍がジャケットのまたスゴいところにも刺繍が

18世紀刺繍はむしろ紳士服で凝った使い方をされてました

色合いも洗練されてますね



それにしても18世紀に刺繍の解説書があったんですね

あ

ステッチの縫い方が載ってる! ランキングステッチにブランケットステッチチェーンステッチ



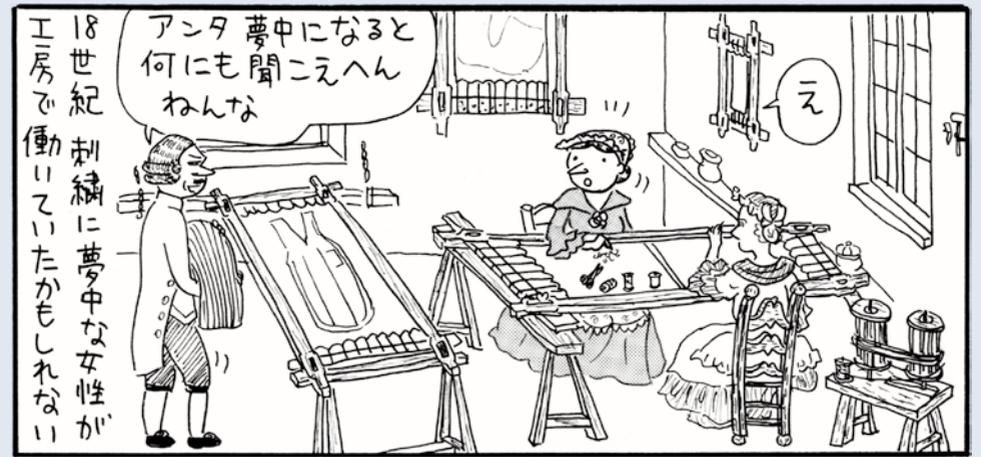
はい女性も男性も働いていたようですよ

あらかじめ刺繍された布地が注文の好みによって選択されました

へえ! 先に刺繍ありきなんですね



男性用スーツ(アビ・ア・ラ・フランセーズ)の一部



「グレーヌの悦び」完



## シュミゼット

素材：綿、貝(ボタン)  
原産国：欧州  
製作年：1850～70年

作りかけのブラウス、ではない。袖や脇布がなく、前後の生地も異様に短いが、これもれっきとしたファッション・アイテム。欧米で「シュミゼット」と呼ばれ、19世紀の女性たちに広く愛用された。着かたは簡単。ブラウスのように上衣の下に装着するだけ。それから付け袖も。そしてあたかも「ブラウスを着ています」という顔をすればよし。見えない部分は省略、という近代服飾の隠れた一端である。(筒井)



参考『Journal des demoiselles』(1857年)より  
京都服飾文化研究財団所蔵

京都服飾文化研究財団所蔵  
成田舞撮影



地産街道を行く  
KCIの収蔵品にみられる  
技法や素材を手がかりに、  
各地を訪れます。

# 京都市染色ものがたり③



KCI収蔵品

デイ・ドレス

1865年頃 イギリス製 京都服飾文化研究財団所蔵 畠山崇撮影

紫色の絹タフタによるツーピース・ドレス。上半身にぴったりと合ったボディ、大きく膨らんだスカートは1860年代半ばの典型的なシルエットを示す。19世紀後期の欧州では裕福な市民階級が増え、流行のファッションを楽しむ人口が急増した。

図1 本品のボディ。 「モーヴ」で染められたと考えられる。鮮やかな発色で退色もあまり見られない。



前々号、前号に続き、京都市内の大学で教鞭を執りながら染色業を営む青木正明さんにKCIの収蔵品の色とその染め技法についてお話を伺いました。

\*染色ものがたり①②はオンラインでご覧頂けます。

[https://www.kci.or.jp/publication/pdf/pdf/fukanwomogaguri\\_018.pdf](https://www.kci.or.jp/publication/pdf/pdf/fukanwomogaguri_018.pdf)

[https://www.kci.or.jp/publication/pdf/pdf/fukanwomogaguri\\_019.pdf](https://www.kci.or.jp/publication/pdf/pdf/fukanwomogaguri_019.pdf)



▲染色ものがたり①



▼染色ものがたり②

**KCI(以下、K)**…これまで本誌で2回にわたり、青木さんに18世紀の「緑」「赤」の染色について教わりました。最終回の今回は、19世紀の鮮やかな「紫」を取り上げたいと思います。

**青木(以下、青)**…この連載が始まることが決まってから、ずっと楽しみにしていました。だって、19世紀の合成染料の紫でしょうか？実は当時の実物の色を見るのは今日が初めてなんですよ！

**K**…そうなんですか！過去2回は植物から抽出した、いわゆる「天然染料」による染色でしたが、今回は人工的に作った「合成染料」です。

**青**…しかも、人類初の合成染料「モーヴ」(注1)ですものね。

**K**…はい。「モーヴ」で染めたと考えられている紫色の作品です。こちらが1865年頃にイギリスで制作された複製のドレスです(図1)。

**青**…ああ！想像していた紫に近いですね。赤紫というか…。本当に鮮やかだなあ。**K**…目が覚めるようなビビッドな色ですね。「モーヴ」というと「薄紫」と訳されることもあり、確かに灰味がかつた紫を指したりもしますが、染める生地によつて紫の諧調は広いと考えると良いかと。このようなビビッドな紫は当時の欧州のファッションにおいて、相当に鮮烈な驚きがあったようですよ。「なんて奇抜な色！」と。

**青**…そうでしょうね。それまでの社会では見られない色合いですから！



図4-2



図4-1

図4-1 世界最大の貝紫用の貝、アカニシを解体しているところ。黄色い部分が染料になる。

図4-2 アカニシから採った染液で染め上げ、仕上げ工程をしている様子。

図4-3 貝紫で染めた絹糸。

画像提供：青木正明氏

図4-3

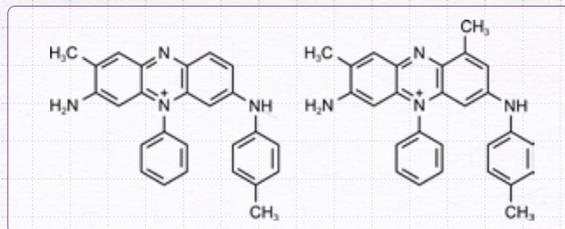
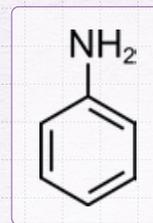


図3 右上：アニリンの構造式 下：モーヴ（モーベイン）の構造式

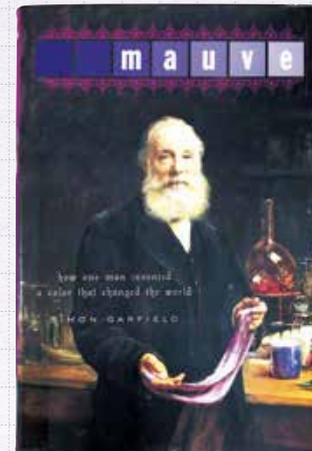


図2 英国で出版されたW.パーキンの伝記。S. Garfield著『MAUVE』W.W.NORTON & COMPANY, 2000年

- K**…この「モーヴ」は瞬く間に流行になって、当時、街中に溢れたと言われています。
- 青**…面白いですね。今でいう「流行色」ですね。
- K**…19世紀はファッションの分野でも様々なイノベーションが起こりましたが、合成染料「モーヴ」の発見はその筆頭に挙げられます。
- 青**…それまで草木や小さな虫から苦勞して色素を抽出して服を染めていたわけですからね。合成染料は錬金術みたいなもんですよ。
- K**…「モーヴ」は若い化学者が偶然に発見した色素だったんですね？
- 青**…はい。イギリスのウィリアム・パーキン「William Perkin (1837-1907)」という化学者で、発見当時は18才くらいです。
- K**…そんなに若かったんですね。確か「モーヴ」の発見は1856年でしたね。
- 青**…そうです。パーキンはとても優秀な学生で、飛び級でロンドンの王立化学大学に入るんですけど、当時、有機化学の分野で最も著名な化学者の一人だったアウグスト・ヴィルヘルム・フォン・ホフマン「August Wilhelm von Hofmann (1818-1892)」に弟子入りするんですね。ホフマン先生はアニリン（図3）という染料をはじめ、様々な有機化合物の合成原料となる重要な物質を見つけ、研究していました。それを目の当たりにしたパーキンはこのアニリンという物質をもとに、自分も何か新しいものに挑戦してみたいと奮起するんですね。そこで目を付けたのがマリアリアの特効薬の開発だったわけですね。
- K**…キニーネ、ですね。合成染料の発見はキニーネの合成実験がきっかけだったと書物でよく見かけます。
- 青**…そうです。キニーネは、もともとキナの葉っぱのなかにある物質で、19世紀初頭に抽出に成功しているんですが、「わざわざ葉っぱから取らなくても、アニリンから作れるかも？」とパーキンは考えたわけです。それで彼は様々な実験をしたのですが、そのなかの失敗作の液がたまたま紫だったんですね。
- K**…それが染料になるとパーキンは気付いた？
- 青**…うん。彼の自伝を読んでも、その時のことはあまり詳しく書かれていないのですが、おそらくそうだったでしょう。これが他の色ではなく紫だったということが大きな要因でしょうね。
- K**…貝紫！
- 青**…そうです。紫は非常に得難い色でした。特に鮮やかな紫は特権階級の色でしたよね。
- K**…はい。高貴な色として欧州では長らく尊ばれてきた歴史があります。
- 青**…染料を得るためには、アツキガイ科の巻貝にあるパープル腺から取られる色素を抽出しなければなりません（図4）。一体、一着の服を染めるのに何万個の貝をプチッと潰さないとイケないのか…。気が遠くなります。
- K**…貝紫と「モーヴ」の色合いは、青木さんの目から見て近いですか？それとも遠い？
- 青**…そうですね…。貝紫の方がもう少し赤みがある気がします。ただ、これは当時の人からすれば、近いと思つたのでしょうね。貝紫染めの技術は16世紀までに欧州で途絶えたと言われていますし、貝紫以外で紫を染めようとしても、藍とコチニール（注2）を掛け合わせる必要があるんです、それもまた工程がたくさん要るわけですから。
- K**…それで紫の液に可能性を感じたパーキンは、染料開発に挑んだわけですね。なにせ一年後には染料の工場を作った、と記録されていますから。
- 青**…発見後すぐにスコットランドの著名な染色会社にそれが染料として使えるかどうか試してもらったらしいんです。そしたら報告書に「素晴らしいです、これはすごい発見ですよ」と書かれていたので、父親や友人に相談してお金を集め、工場を作ったらしいんですよ。
- K**…人類初の合成染料「モーヴ」はこうして誕生したんですね！
- 青**…「モーヴ」は塩基性染料（注3）なので、それまでの媒染（注4）が必要だった天然染料と比べれば圧倒的に染めるのが楽なんです。助剤として水酸化ナト



図5 「モーヴ」で染められた鮮明な紫色のドレスが1860年代のファッション誌に頻出している。全て『Journal des demoiselles』誌より。左から1867年、1862年、1864年刊行。



青木正明著「伝統色づくり解体新書「天然染料と衣服」カラー写真で理解する染めの再現」(日刊工業新聞社)

### 青木正明氏プロフィール

天然色工房 azo-dye 主宰、京都光華女子大学短期大学部 准教授兼務。  
東京大学医学部保健学科を卒業後、株式会社ワコールにて企画業務を担当。草木染めを利用した企画に携わる中で天然染料への造詣を深め、退社し廣田益久氏に師事。古代染色研究家 前田雨城氏の作品に感銘を受け、古代染色研究のため2002年に独立。

リウムを使っていた可能性はありますが。  
K.. その助剤は「モーヴ」を溶かした水溶液と一緒に入れるのでしょうか？以前にお伺いした天然染料の場合だと、様々な水溶液を準備して、段階ごとに何度も染めるという工程が必要でしたが…。  
青.. そこが大きな違いですね。助剤を含め、一つの水溶液のなかで染色が完了しますから、基本的には一回で染まります。

K.. 簡単に大量に染められた？  
青.. そうです。パーキンが初めて作った時は液体でしたが、すぐに彼はこの染料を粉で作っています。これが必要に応じて水溶液にして染めました。  
K.. 工程も何もかも画期的だったわけですね。  
青.. はい。この「モーヴ」の発見がきっかけで、せきを切ったように鮮明な緑や赤など様々な色の合成がなされるようになりました。

K.. 19世紀後半は、服飾の流行が加速します。デパートが誕生したり、ファッション雑誌が普及したり、ファッション・ブランドが次々に創業したり…。様々な要因で新しいファッションを求める欲望が喚起され、短期的に流行が移り変わっていくのですが、「色」の変化はとても重要です。誰の目にも分かりやすい「色」が流行のサイクルに組み込まれば、必然的に「流行から遅れた色」も生まれますから。合成染料の出現がファッションの興味期限を早めたことは想像に難くありません。

青.. そうですね、次々に新しい色が生まれるわけですからね。パーキンは合成染料でとても備けたようですよ(笑)。しかし彼のすごいところは、30代で会社をすべて人に譲って、また化学研究の世界に戻らなすよね。その後に何本も論文を発表しています。ともあれ、パーキンが合成染料を発見したお陰で、その後の染色は飛躍的な進歩をみせたわけですね。  
K.. なるほど。今、私たちが見ている人工物が鮮やかなのは、彼の功績が大きいですね。

青.. 早かれ遅かれ合成染料は出来ていたと思いますが、もしキニーネの実験中の失敗作が紫でなければ、合成染料の開発は数十年遅れていたかもしれません。  
K.. これまで3回にわたり、染色について専門的なお話をお伺いしてきました。化学式を用いた解説は少し難しかったですけど(笑)、どの回も刺激的でとても面白いお話でした。

青.. こちらこそ、貴重な收藏品を間近で見ることができてすごく楽しかったです。K.. 青木さんは染色の世界で長く活躍されていますが、最後に今後の展望などをお聞かせ頂けますか？  
青.. そうですね、私は天然染料を生業にしているので、やはりその可能性を追求していきたいな、と。最近SDGの意識の高まりもあって、エンドユーザーだけでなく企業からも天然染料で何かできないか、とオファーして頂くことが増えてきました。大小に関わらず、天然染料の良さや特性を活かした活動をしていきたいですね。

K.. また是非、いろいろなご教授頂ければ嬉しいです。3回のインタビュー、本当にありがとうございました。  
聞き手・筒井直子 2022年6月23日取材 (敬称略)

### 注釈

- (1) アニリンから合成された紫色の人工の染料。モーベンともいう。
- (2) 中南米のウチワサボテンに寄生する虫。体内に蓄積する赤が繊維製品や食品の染料として用いられる。
- (3) 分子中にアミノ基やイミノ基などの塩基をもち、水溶液中で陽イオンとなる染料。
- (4) 繊維が染料で直接染まらない場合に用いる、染料を定着させるための薬剤。鉄やミョウバンなどがある。

TODAY'S RESTORATION ROOM

## 今日の補修室

第20回

### 補修室の七つ道具⑤



前号に続いて、今回も収蔵品の保存容器をご紹介します。

パラソル  
1864年頃 フランス製  
京都服飾文化研究財団所蔵



前号では、収蔵品の形状・素材・状態に合わせて、収蔵庫で保管するための容器を製作する仕事を紹介し、その事例をご紹介しました。  
今回の保存容器は1860年代のパラソルのためのもの。傘地(生地)は白の絹製で、縁にはシュニールの飾りがついています。そして、柄の部分は象牙、ハンドルはサンゴで作られており、複雑な形状、かつ壊れやすい素材でできています。  
このパラソルのためにどのような保存容器を作ったのか、ご覧に入れましょう。(伊藤ゆか)

七つ道具その⑤  
保存容器②



パラソルのための保存容器。  
長さ約77cm、幅約21cm、高さ約15cm。

拡大図



象牙製の柄の部分  
を薄葉紙でくるみ、紐  
で固定。

拡大図



傘地との段差を考慮し、柄がのる部分を少し高くしている。

Step  
03

サンゴ製のハンドル部分。  
壊れやすい部分にテンションがかからず、中空に浮くような形で保管できるよう設計している。

Step  
02



Step  
01



蓋を開けたところ。保存容器に留めつけられた3本の紐でパラソル本体を固定し、保管する構造になっている。

拡大図



容器内で動かないよう、傘地部分を薄葉紙でくるんで、紐で優しく結ぶ。

file NO.01

item

### 扇

製作地：日本  
製作年：19世紀後期

薄板状の象牙をリボンで繋げたブリゼ型。  
蒔絵や象嵌による装飾。  
要のタッセル飾りには象牙の緒締玉付き。  
寸法は高さ19.6cm、扇面幅34cm。

note

本作品は、19世紀後期の日本において、欧米市場向けに制作・輸出された扇です。扇を開くと、浮世絵風の人物などが蒔絵で加飾されていますが、今回近接したのは、親骨に彩られたこちらの動植物。近接することでよりはっきりと伝わる、艶やかな光沢を帯びた南天の実や、ノゴマと思われる鳥の丁寧に描かれた羽と金色に光る目。今にもこちらに飛び出してきそうなその立体感には、「芝山細工」と呼ばれる嵌装が用いられています。貝やヒスイ、サング、ベッコウなどを用い、本作品には他にも菊や萩、小鬼百合など秋を感じさせる絵柄が描かれています。繊細かつ複雑な手仕事による工芸品は、その文様の美しさや珍しさも相まって、西洋のひとびとを魅了しました。(五十様)

▶ 1870年代に日本の小袖からロンドンで仕立てなおされたドレス。本品の扇とともに、当時、欧米で流行していた日本趣味がよく表れている。

京都服飾文化研究財団所蔵  
リチャード・ホートン撮影



肉眼では見えにくい収蔵品の細部に、  
学芸員の視点から迫ります。

# 学芸員の虫眼鏡

## KCIギャラリー展示「フランス文学が誘う街とファッション —19世紀後期から20世紀へ—」を開催します。

19世紀後期、近代的な都市に生まれ変わったパリは、多様な文化、芸術、そしてファッションで彩られました。その華やかで美しい様子は、当時の画家や小説家が克明に描き出しています。本展示では、19世紀末から20世紀初頭のパリの情景を著したフランス人作家マルセル・ブルーストによる『失われた時を求めて』の描写を手掛かりに、KCIの収蔵品のなかから約10点の衣装類を展示します。ブルースト没後100年の今年、皆さんを当時のパリへと誘います。

会期 2022年9月26日(月)～12月23日(金)  
開館時間 午前9時30分～午後5時 \*入館は午後4時30分まで  
休館日 土・日・祝日 \*ただし、11月3日(木・祝)は開館  
会場 KCIギャラリー \*86m<sup>2</sup>  
京都府京都市下京区七条御所ノ内南町103  
株式会社ワコール京都ビル内  
入場料 無料



パキヤン デイ・ドレス 1903年頃  
京都服飾文化研究財団所蔵 広川泰士撮影

- 新型コロナウイルス感染症への対応等、最新の情報についてはKCIホームページをご確認ください。
- 新型コロナウイルス感染症対策のため、会期や入館方法の変更、休館の可能性があります。

## 服をめぐる

「服をめぐる」衣服の研究現場より 第20号  
2022年8月31日発行

—

### 発行

公益財団法人 京都服飾文化研究財団 (KCI)  
〒600-8864  
京都市京都市下京区七条御所ノ内南町103  
株式会社ワコール京都ビル内  
電話：075-321-9221  
ウェブサイト：<https://www.kci.or.jp/>

編集：筒井直子、福嶋英城、五十棲亘 (京都服飾文化研究財団)  
デザイン：坂田佐武郎、桶川真由子 (Neki inc.)  
写真：成田舞 (Neki inc.)

### 編集後記

今号から新たなコーナー「学芸員の虫眼鏡」が始まりました。私たちが普段、収蔵品に接していると、手の込んだ細かな技法や素材に驚かされることが多くあります。そして、「これ見て！見て！」と誰かと驚きを共有したい気持ちが始まり湧いてきます。そこで、このたび収蔵品の細部にグッと接近したものをお見せするコーナーを設けました。一緒に虫眼鏡を覗くつもりで皆さまと驚きを共に出来れば…と願っています。